別府大学
05.11.21
図書館

座談会「地域社会研究センター発足の背景と今後の展望」

「地域社会研究」編集部では、地域社会研究センターの本格的活動開始3周年を迎えて、センター発足の背景を知るため、4 人の研究員による座談会を企画した。また、センターの3年間の活動は隔月で発行する「センターニュース」で毎号詳細に報告されているが、本座談会の資料として3年間の活動を纏めてみた。本センター理解の一助になれば幸いである。

参加者　秋田清（所長　文学部人間関係学科教授）
大嶋美登子（文学部人間関係学科教授）
篠籐明徳（文学部人間関係学科教授）
梶原博（短期大学部経営情報文化科助教授、4月1日より）
司会　松田美香（短期大学部経営情報文化科講師、4月1日より）

司会　センターの活動が本格化して、ちょうど3年が経ちました。メンバーも学内の研究員が13名、学外の客員研究員が2名ということで、次第に陣容が整ってきましたが、センターがどのような経緯で発足したのかなど、メンバーでも知らないことが多いですね。そこで今日は、センターの発足や初期の活動に関わってきた4人の研究員に集まって頂き、その辺も含めてお話頂きたいと思います。

篠藤　「原点」を語れる証人といえば、秋田所長と梶原先生の2人しかいないですね。私自身も90周年のシンポジウムからですから、設立の背景は知らないです。センターは、秋田先生の個人的な思い入れなくして誕生していませんので、個人的なことも含め、秋田先生の想いというものを聞いてみたいですね。

生活の場としての「地域社会」の見直し

秋田　私は15年前に別府大学短期大学部（商経科に）来ましたが、私が理解していた「大学」のイメージと大分違い、正直言って戸惑った部分がありました。でも、学生と話をするうちに、ここで何をしていけばいいのかを考えました。当時、「地域づくりの先進県としての大分」のイメージがありましたので、そこで何をするのかを考えながら、最初の3年間、学生の感覚を掴みたいと思ってきました。学生を学外へ連れ出し、調査研究レポートを作成することや他にいろいろとやってみましたが、何かにつながっていくという感触が得られない。そのうちに留学を決め、半年間イギリスに滞在しあちこち歩き回って、「人間何をやってもいい。大学だからという枠にとらわれないで、楽しいこと、いろいろな好きなことをやってみたい」と痛感した。その影響が大きいですね。

そこでイギリスから帰国して短大に戻って改めて考えてみたら、短大には、商経科、生活文化科、食物栄養科、初等教育科など生活に関係あることが揃っていた。生活全体の再編、見直しをしようと、留学中に私のゼミを受け持ってくれた梶原先生やゼミの学生と一緒に何かやろうということになりました。それが1991年のことです。

司会　それでセンターの設立という形になったのですか。

秋田　センター設立には、いくつかの伏線や試行錯誤がありました。地域調査をする組織を作ろうと、商経科の先生と昼食会の形式で検討会を始めたりしました。でも、地域の面積や人口を調べてとか、そういう話しも出て、少し私が描いていた「生活の見直し」というイメージと、議論が違うんですね。それで頓挫しました。

篠藤　地域社会を「実体的生活世界」として見直していこう、また、関わっていこうという趣旨からすれば、既存のそういう調査研究の姿勢は、全く似て非なるものですね。

秋田　少し唐突かもしれませんが、着任したばかりの時に80周年記念の行事があって、西村理事長が「地域の中で生きる大学」という言葉を既に使っていました。それはすごく新鮮に聞こえました。理事長はまた、公開講座の講義の中で「風景」という言葉をしばしば使われました。理事長のこの「風景」ということばの響きがとても新鮮でしたね。それに、影響を強く受けた感じがします。私が「地域環境学」などと言い出したのは、ここに端緒があります。

「公開講座」を通して外部との付き合い

大嶋　私はそうした動きの周辺でいろいろ見聞きしていた感じですが、「公開講座」との関係も大きかったのではないでしょうか。「公開講座」はいつから始まりましたか。

秋田　私がきた頃、既に2，3回目でしたから、本当に長い歴史があります。最初商経科から始めて、短大全体になったと思いますが。要するに、企業のトップに講義をして頂き、

学生に聴かせて、「お宅の社長さんのお話を聴いた学生ですから、採ってください」という就職対策の意味もありましたね(笑)。それと、ちょっと変わったことをやって短大自体の名前を知らせたいということもあったのではないでしょうか。ただ、外部から講師を招いて学生に聴かせるというのは、恐らく全国で初めてのケースかもしれません。それで、文部省の受けがものすごく良くて・・・。

大嶋　そして文部省が真似をして（笑)、生涯教育とか（笑)。

秋田　それはそれで効果がありました。「公開講座」自体は、地域社会との交流のスタートとしては面白かったのではないでしょうか。外の教育力を内に取り入れるというのがセンターの考えと共通しています。

実社会からのアプローチ

梶原　学生の目線に合ったという意味で、私達大学の人間の世界からいかに広げていくかということが問題でした。実践教育というのは技術の中に社会理解みたいなものが直接反映されているのだ、それを知って就職していくのといかないのでは違ってくると、理屈ではそう知っていても、私自身は大学以外の世界を知らなかったので、それ以上はできませんでした。公開講座の企画に関わるうちに、トップではなく、現場の中核的人たちの話を聞きたいと思いました。

大分の商工会議所に相談に行ったところ、薬師寺さんという方が、それは絶対良いことだからやりましょうということになって、人を探してもらいました。そうやってできた実社会サイドとのつながりの中で、彼らは彼らで、学生や大学への要望・希望・夢が語られて、それが僕らと非常にマッチしたということがあります。

司会　地域社会の中にも大学に対する期待があったということですね。

梶原　地域に根ざしたフェイストゥフェイスの付き合いがなければいけないという危機感を持った地域の中小企業の人たちが今でもいるし、その頃もいました。そのひとつの解決策として、10代の学生たちのアイデアを聞きながら、何か新しい地域文化をつくっていこうという流れの中で、中小企業の人たちを呼ぶという企画が大分キャンパスの中で生まれた。まず、大分銀行の人などが、今どういう大学・学生が求められているのかを話してみようじゃないですか、っていうのが、ある程度自然発生的に出てきたのがセンターの名前で最初に行った「中小企業について考える」のシンポジウムですね。

挾間町との付き合いの始まり

司会　センターの活動で挾間町との付き合いはとても意味があると思いますが、どのようにコンタクトができたのですか。

秋田　短大3科が大分キャンパスに移ったのが1992年の10月でしたが、その翌年にはもう挾間町の松田さんが訪ねて来ていたんですよ。(一同感心）挾間町の「きちょくれ祭り」

に来て欲しいということでした。大学と一緒に何かやりましょうと言われたけど、そうは言ってもこちらの体勢が整っていなかったし、次の年には学生を祭りに行かせたけれど、お互いに学生たちを充分にケアできませんでした。ただ、松田さんはもともと東京の日野市の職員であった人で、また、大分大学の経済学部の大学院に社会人入学していましたから、学問に対する関心も強く、話し相手として面白かったですね。

「地域社会」をフィールドに学生教育

大嶋　専攻科商経専攻の教育のキーワードも「地域社会」だったのではないでしょうか。

秋田　そうですね。「地域に出かける」ということを考えていました。また、その学生がセンターの活動に関わるといい、と話していました。

大嶋　私も専攻科商経専攻で教えていましたので、いつも半日ほしいなと願っていました。学生を地域に連れて行くとすれば、時間の組み方が問題になります。私の後に講義を担当しておられた先生にお願いして時間をもらって、大分県精神保健福祉センターに学生たちをつれて出かけた事があります。学生教育でも私自身にとっても地域に出て行くこと、地域社会という視点を持つことはとても意味のある事だと感じています。私は心理学を専門としていますが、心理家の中には、個人の心理ばかり目を向けて、その人が暮らしている地域や社会的状況を含めたその人の生活全体をあまり考えない人がいます。それでは、心理的援助などできません。

篠藤　私は、地域経営論を商経専攻科で持たせてもらいました。
商経科の「地方自治論」では、ドイツの連邦制度や自治制度を取り上げて講義を組み立て、まったく面白くない講義をして・・・、(チラッと学生に目をやる素振り)「面白くないでしょ」って（一同笑)、「仕方ないんだ。これで準備したんだから」って（笑)。そこで、地域経営論の講義では、12回の講義の中で、最初の3回は概論的なことをやって、次に、4回にわたって自治の現場で学ぶという形を取りました。その時、挾間町役場の方が、高齢者福祉だとか市民農園、議会の説明をそれぞれの現場でしてくれました。これは、学生教育でとてもよかったですね。その後、学生それぞれがレポートを書いて、あとの4回で発表しました。毎年テーマを変え実施しましたが、大分キャンパスと挾間町とは近いので実現できたと思います。

大嶋　私が着任した頃、秋田先生や梶原先生は学生を地域に出して教育するということに自信を持っておられたような気がします。私自身は学生達に戸惑っていました。私はこの子たちと何ができるの？って、本当に戸惑って・・・。そこで、あまり戸惑っていないお二人の姿を見て、そこから学ばせていただいた気がします。

90周年シンポと公開講座「別府湾」

梶原　センターが現在のような活動の形に変わってきたのは、学園創立90周年のシンポジ

ウムと公開講座「別府湾」をしたころですね。

篠藤　90周年の時に予算付きで3本シンポジウムをやることが決まりました。まず、宇佐で福祉のシンポ、それから大分キャンパスのコスモス祭でひとつ。そして私に突如「じゃあ、篠藤さん日田でやってください」と言われてびっくりしましたが、日田で「酒と地域文化」のシンポジウムを開催しました。

秋田　読売新聞から別府湾のシンポジウムをやりませんかって言われたのは、非常にいいタイミングでした。向こうから大学への申し込みは全く突然で、我々に振られたわけですけど。

梶原　座学とフィールドという提案された形を生かしながら、私達で組み替えちゃった形ですね。講義だけではなく、前後も含めて講師の方と話し合いながら、授業＋αの形で広げていきたいという話をしたり、その時限りではなく、細く長く繋がっていきたい、人数はそんなに多くなくていい、そんな風に組み替えましたね。これが、その後センターのシンポジウムの型になったと思います。

篠藤　短い期間に連続14本の公開講座「別府湾」を読売新聞と一緒になってやって、「あぁ、これでいいんだ」と、ひとつのパターンができたんですよね。そして、年度の終わりぐらいにこういう紙もの（センターニュース・雑誌）を作りましょうよと、名古屋に視察に行った時、梶原さんがホテルに持ち込んだノートパソコンを二人でのぞき込みながら、今のニュースレターのレイアウトを作りました。

知多半島総合研究所を訪ねて

秋田　日本福祉大学の知多研に行ってみて、私達との違いがよくわかりましたよね。それが非常に面白かったのと、知多研に行った時は、研究員と事務員が名コンビで素晴らしかった。

篠藤　自分で本当にゼロからやった人っていうのは、物事の本質を知っているじゃないですか。あの時にセンターニュース第1号を見せたら、知多研の山本さんが「あ、これは先生方が手作りでやっているんですね！」と、それで「自分達は負ける」って言いました。つまり、学校がお金を用意して、部屋を作ったり事務員を用意したりなんていうのはすぐできますが、大学教員が手作りでやっているということに、山本さんのようにゼロから作ってきた人は、私たちの意気込みみたいなものを直感したのではないでしょうか。

そして、昨年は法政大学に出かけたわけです。法政大学の常任理事（設立当時）の肝いりでやっていたせいか、年間予算4000万、それに専従の事務職員を数名抱えていました。確かに規模は大きく、勉強になりましたが、本質的には負けていないという気がしましたね。

梶原　特に山本さんがはっきり言っていたけれど、あれだけ長い歴史の地域研究のセットを持っていながら、基本的には大学の先生は自分の研究対象として以外は見ません。だか

ら、外部からの仕事を振るのが実に大変です、と。事務方がきっちりこうしているからできるんで、そうじゃなきゃ大学の先生がこういうことするわけないって（笑）。だから先生たちって変わっていますねとか、大変ですねとか。

現在の課題と展望

司会　これまで3年間の活動を通して、今の課題は何でしょうか。

秋田　公開講座「別府湾」で出会った人たちと私たちはまだ繋がっているけれど、各シンポジウムで関わってくれた人たちを横に繋げる仕事はしていませんね。例えば、町村でも補助金を利用する場合、知恵の使い方なんか分からない時もありますね。その時、センターがコンタクトしている自治体を互いにつなげるというような仕事もあるのではないでしょうか。今年度、別府で福祉シンポジウムを実施しましたが、福祉協議会の人と地域で福祉に関心ある人々を繋げるとかも必要です。

大嶋　そうなんですよ。人のネットワークを作るような井戸端会議みたいなことをやっていきたいですね。

秋田　センターを中心にしたメールリンクは試しに作ってみましょうか？現在センターのメールもセンター研究員全員に行き渡っていない時があります。もちろん、管理運営をどうするかなど検討しなければいけませんが、いろいろな質問が飛び込んできても、センターには13名の研究員がいますので、自分の関係するフィールドをカバーしながら、取りあえず個人の責任で応えていくとかするといいかもしれません。

篠藤　地域社会というのは総合体ですから、いろいろな人か関係して発言するのは良いですね。昨年度、連続教育シンポジウムをやりましたが、「キレる」「少年犯罪」などは、実は“経済構造の激変”とも関係している。でも、いわゆる教育のプロの議論では、そういう視点が欠ける時がありますね。

司会　最後に、秋田所長から最近感じていることをお聞かせして頂き、結びにできればと思います。

秋田　これも全く個人的なことで、センターの方針と全く関係がありませんが、人間は神話なんてものをずっと作ってきたわけで、現代は「物語が成立しない時代」と言われていますね。私たちの世代では、社会主義思想の影響は大きかったですから、全共闘の時代を経て、生きることの原点から始めようと、私もそうですが、農業を始めた人もいました。これまで学生たちにも、”自分たちの新しい物語を作ろう“って言ってきました。少しキザだけど、そういう気持ちでやってきました。今、そこで生きている人の物語を作ろう、歴史や地理条件を使いながら、俺はここで生きるって決めてやってみて、そして死ぬ時に「まぁ、いいか」と言える地域を作りたいという想いがしています。

（2001年2月14日　秋田研究室にて）

地域社会研究センターのこれまでの活動

1998年

2月28日　シンポジウム「大学と地域の企業」(大分キャンパス)

9月26日　公開講座「別府湾」が始まる(読売新聞社との共催)
第1回「タイムトリップ・別府湾（1）」
講義「なぎさから地球史が見える」

9月27日　野外講義「干潟を歩く」

10月　3日　90周年シンポジウム「福祉と地域文化」(宇佐教育研究センター)

10月24日　公開講座「別府湾」第2回「タイムトリップ・別府湾（2）」
講義「古代人の別府湾」

10月25日　野外講義「体験・古代人の別府湾」

11月　7日　90周年シンポジウム「地域・わかもの・大学」(大分キャンパス)

11月28日　公開講座「別府湾」第3回「海と川と森が手をつなぐ（1）」
講義「私たちの流域提携～大野川の河童たちの目論見～」

11月29日　野外講義「3匹の河童に会いに行こう」

11月14日　90周年シンポジウム「酒と地域文化」(日田歴史文化研究センター)

12月19日　公開講座「別府湾」第4回「海と川と森が手をつなぐ（2）」
講義「湧水をつくる仕組み～鹿鳴越山系の恵みと海底湧水～」
討論「流域連携から湾域連携へ」

12月20日　野外講義「鹿鳴越湧水と八坂川巡り」

1999年

1月21日　別府つるりん通り商店街整備基本構想策定(浦、篠藤研究員)

1月23日　公開講座「別府湾」第5回「甦れ別府湾」

2月10日　日本福祉大学知多半島総合研究所視察(秋田、梶原、篠藤研究員)

2月20日　公開講座「別府湾」第6回「別府湾とウォーターフロント」

3月　6日　公開講座「別府湾」第7回「かんたんの海・別府湾」

3月15日　センターニュース第1号創刊

3月27日　連続シンポジウム「学校と地域社会」第1回「不登校を考える」

5月15日　センターニュース第2号発行
挟間町佐藤成己町長センター顧問に就任

6月19日　連続シンポジウム「学校と地域社会」第2回「ルーズソックスなぜ悪い？」

7月15日　センターニュース第3号発行
挟間町職員　松田伸夫氏客員研究員に就任

9月15日　センターニュース第4号発行

10月 2日　連続シンポジウム「学校と地域社会」第3回「学級崩壊」
10月27日　挟間町挟間中学校で「社会言語学的調査・研究」開始(松田美香研究員)
11月15日　センターニュース第5号発行
　　大石昭忠日田市長センター顧問に就任
12月 4日　連続シンポジウム「学校と地域社会」第4回「地域社会の役割」
12月25日　「地域社会研究」第1号創刊

2000年
1月15日　センターニュース第6号発行
2月23日　学校法人別府大学・挟間町交流協定調印式
3月 1日　「地域社会研究」第2号発行
3月 2日　法政大学地域社会研究センター視察(秋田、梶原、篠藤、瀬戸口研究員)
3月15日　センターニュース第7号発行
　　嶋田清隆・日本青年館常任理事センター顧問に就任
4月28日　「挟間町ホームページ作成」業務を受託
　　梶原研究員が担当
5月15日　センターニュース第8号
　　永松博文豊後高田市市長センター顧問に就任
6月 1日　挟間町「初級パソコン講習会」開催
　～29日
7月 6日　「挟間町里歌文化構築事業支援業務」を受託
7月15日　センターニュース第9号発行
7月17日　センターホームページ完成
8月24日　滋賀県甲良町視察(秋田研究員)
　　8月30日　福岡県山田市視察（挟間町職員と秋田、舩橋研究員）
9月 1日　「地域社会研究」第3号発行
9月15日　センターニュース第10号発行
9月25日　挟間町総合計画4プロジェクトに委員(秋田、舩橋、篠藤研究員と初等教育科豊永教授)を派遣
11月 7日　豊後高田市グリーンツーリズム実践計画策定業務を受託
11月15日　センターニュース第11号発行
　　稲生亨・佐賀関町議会議長センター顧問に就任
12月16日　挟間町方言フォーラム「まち・ひと・ことば」

2001年
1月13日　福祉シンポジウム「みんなで安心して暮らせる地域を作ろう！」(別府市社会

福祉協議会・人間関係学科と共催）

1月15日　センターニュース第12号発行

1月18日　「シニアのためのパソコン教室」（挾間町・大分シニアネットとの共催・大分キャンパスで実施）開講式

2月17日　シンポジウム「大学生から見た日田の町－豆田・隈－」

3月　1日　「地域社会研究」第4号発行

3月10日　シンポジウム「挾間町里歌文化と加藤正人」

3月11日～14日　関西地方における大学と地域社会の関わりの調査・研究(秋田、篠藤、梶原、大嶋研究員)

3月15日　センターニュース第13号発行